

Title	鈴木鴻一郎編 経済学原理論 上
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.7 (1961. 7) ,p.610(94)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610701-0095
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610701-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スミス研究への重要な指針である。(未来社刊・B6・二三三頁・三八〇円)

—白井 厚—

* * *

鈴木鴻一郎編 『経済学原理論 上』

わが国における『資本論』研究の歴史は、過去数十年の長きにわたっているのであるが、戦後その動向は戦前にも増して理論的研究から現状分析に重点が移されてきた。特に、戦後世界資本主義の顕著な動向としての産業循環の変容は、恐慌理論の分野に新たな発展を促がすものとなったと、現状分析のための理論という意識が強くなり出されてきた。したがって『資本論』研究それ自体にも、こうした時代の動きによるところの反省が提起されたことは当然であるといえよう。ことに近年『資本論』の具体化という問題意識が明確になるに及んで、『資本論』研究はいまや解釈学からの脱却という最大の試練に直面しているのではなからうか。いわゆる宇野理論、ないし宇野学派といわれる宇野弘蔵

教授を中心とした人々による経済学の体系的検討は、かかるマルクス経済学における最近の状況に対する反省提起の一形態であり、また広く云って『資本論』の具体化ということへの一アプローチとして看過しえない地位を占めるものである。

本書がその二分冊をなす『経済学大系』(宇野弘蔵監修)は、とくに戦後『価値論』、『経済原論』、『資本論』と『社会主義』などの一連の労作や諸論稿(いずれも論文集として既刊)によって、従来の『資本論』理解に多くの疑問を提出し、『資本論』によって展開された資本主義経済の理論体系をスムーズに現実に適用し、経済学の出発点であり、かつ到達点である現状分析を包含する経済学の体系的再構成を志向されてきた宇野教授の独特な経済学方法論と、それに基づく理論的、実証的諸成果を吸収し、原理論・段階論・現状分析の三分野を余すところなく体系化したものとして注目に値する。

本書『経済学原理論 上』は、所謂原理論をなすもので、歴史的發展に規定された資本主義経済体制を最も純粹な姿において把握しようとするもので、商品経済を体制として全

面化せしめる段階における資本主義的生産様式を対象とするものである。しかしながら、経済学の対象としての資本主義的生産様式は自由競争段階の産業資本主義として直接的に把握しえない。即ち商品経済が「世界市場」的規模において生産体制の基軸になりえなければ、換言するなら、「世界市場」的商品経済がそれ自体新たな生産諸関係を展開するものとして把握されなければ、資本の生産過程が論理的に展開しえないのであり、その為に原理論としては労働力の商品化を最も重要な契機として導出するのである。本書のみるべき特徴はまさにこの労働力商品の検出に至る論理過程のうちに見出されねばならない。ただし、資本が生産過程を把握する指標たる労働力商品の特殊性は、「世界市場」的商品経済における商品、貨幣、資本の形態規定の発展(Ⅱ形態規定の移行過程)が論理必然的に実体規定(Ⅱ生産過程把握)を展開するということのうちに横たわっていると考えられるからである。(東大出版会・A5・二三一頁・四〇〇円)

—飯田裕康—